



すまいるたうん

発行元
東京新聞
南千住専売店
TEL3803-1781
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

南千住の庚申様、ご存知ですか。

素盞雄神社にほど近い荒川区南千住6丁目の小路に、高さ1メートルほどの小さな祠（ほこら）が建っています。区教育委員会が1996年に発行した「荒川区民俗調査報告書（4）南千住の民俗」はこの祠を「庚申（こうしん）横丁の庚申堂」と紹介し、「宝暦（1751～1764年）年中に建立せられたもので、失せるもの出るの伝説により参詣するものが多い」と記しています。実はこの記述は昭和11年の「荒川区史」からの引用で、「現在の庚申塔は再建されたもの」という注釈がされています。

このあたり一帯の土地は、猪鼻庄右衛門さんという方の持ちものでした。区の報告書によるところ、この庚申堂が建てられたのは260～270年前ですが、おそらく大正末期から昭和初期のころに、現在の場所に移設されたと思われます。祠は、小路を挟んではす向かいに住む元建築会社社長の牧田健次さん（78）の父、故・牧田忠次郎さんが長い間、管理をしてきました。忠次郎さんも生前は防水工事の会社を経営し、蔵前国技館の防水工事も担当したとか。力士たちのタニマチでもあったようです。

庚申とは、庚申信仰とはどういうものでしょ
うか。百科事典などによると、庚申とは十干十二支（じつかんじゅうにし）の組み合わせのひとつで、庚申信仰とは「庚申の日の禁忌を中心とする信仰」とあります。十干と十二支の組み合わせは60通りあるので「庚申の日」は60日ごとにめぐってきます。庚申信仰は中国を起源とし、日本では神道や仏教、さらには民間習俗な

どが合体・融合しあつて独自に進化していきました。そして庚申信仰に基づいて建てられた石塔のことを庚申塔と呼びます。

人間の体内には三戸（さんし）と呼ばれる三種の虫があり、この虫たちが庚申の日の夜、寝ているうちに体から抜け出し、天に昇つて天帝に、その人が行つた悪事を告げに行く。天帝はそれを聞いて、その人の寿命を削ってしまう。だから人々はその夜は眠らずに身を慎み、虫が逃げ出さないように徹夜する、という習わしが平安時代に日本に伝わり、のちに民間信仰となつて広まつたとされています。



写真をご覧ください。正面には三種の虫を抑えるご本尊の青面金剛（しょうめんこんごう）が据えられ、その足は邪鬼を踏みつけている。そして台座には、天帝に罪を告げ口されないよう、三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）が彫られています。



有名な庚申堂の歴史や由来は語り継がれても、南千住の小さな祠の来歴は人々の記憶の中にはなく、「もう古い人じやないと分からんじやないかな」と健次さんは少し悲しそうに言います。この地域の歴史を残すためにも、歴史をお知りの方は、NPO法人「粹と縁」にメールで情報をお寄せください。アドレスは ikitoen@outlook.com です。

は話します。

小路をはさんで、庚申堂と向かい合つて理容店を営む健次さんの弟、末廣さん（73）の記憶から、この祠が建て替えられたのは50年ほど前だということが分かりました。有志の方々がお金を出し合い、地元の石屋さんが青面金剛の石像を新たに彫り上げました。だがその石屋さんも、もうなくなつたそうです。

長い時間をかけて庚申信仰は広まり、虫を閉じ込める「禁忌の日」というだけでなく、病気平癒や厄除け、さらには長寿延命、心願成就などのご利益もあると考えられるようになります。道路の拡張整備などで撤去・移転された塚やお堂、塔も多いのですが、気を付けて探すと、寺社の境内、街道脇などに見つけることができます。都電荒川線に残る「庚申塚」「新庚申塚」の駅名はよく知られており、巣鴨の庚申塚は猿田彦大神を祭神としています。

庚申堂の前の小路はかつて「庚申通り」と呼ばれ、5月5日のこどもの日には子どもたちが祠の前に集まり、「てんつくてんつく」と太鼓をたたきながらお参りした、と健次さん。忠次郎さんがお元気なころは庚申の日に近所の人たちを家に招き、夜を徹して過ごす「庚申講」を開いていたと言います。「うちのおやじは力を入れて庚申信仰をしていましたからね」と健次さん